

所員自著紹介

1. 永野善子（編著）『帝国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携』

（神奈川大学人文学研究叢書 40）御茶の水書房，2018年3月20日，xvi+273頁+ii

本書は、複数の専門領域（国際関係論・歴史学・人類学・経済学・地域研究）を専門とする研究者たちが、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験に照らしながら、帝国論とナショナリズム論に対して、近代国家形成、民族独立運動、脱植民地化過程、ナショナル・ヒストリー（国民史）の創出など、複数の個別の諸問題から接近した3年間の共同研究の成果である。本共同研究は、歴史的事実の積み重ねだけでなく、さまざまな地域で歴史がどのように語られてきたのか、つまり歴史についての語り（言説）に注目し、それ自体が現実の歴史にどのように影響してきたのかにも注目してきた点に特徴がある。本書には9篇の論文が収録されており、各章の論題と執筆者は以下のとおりである。

第1章「文学（者）による文化工作・建設戦：上田廣「黄塵」の意義」（松本和也）

第2章「サイパン戦秘史にみる人種差別とナショナリズム」（泉水英計）

第3章「香港における入境管理体制の形成過程（一九四七～五一）：中国・香港間の境界の生成と「広東人」」（村井寛志）

第4章「タイにおける王党派思想とナショナリズム」（山本博史）

第5章「分断される国家と声でつながるコミュニティ：タイにおける政治的対立と地方コミュニティラジオ局」（高城玲）

第6章「フィリピン革命史研究再訪：近年のフィリピンにおける研究潮流を背景として」（永野善子）

第7章「米国帝国下のフィリピン・ミンダナオ島開発とフィリピン人エリート：一九二〇年代のゴム農園計画を中心に」（鈴木伸隆）

第8章「キプシギス人の「ナショナリズム発見」：ケニア新憲法と自生的ステート＝ナショナリズムの創造」（小馬徹）

第9章「ボリビア「複数ネーション国家」の展望：アフロ系ボリビア人の事例から」（梅崎かほり）

（永野善子）

2. 深沢徹『新・新猿楽記——古代都市平安京の都市表象史』

(神奈川大学人文学研究叢書 41) 現代思潮新社, 2018年3月30日, 346頁

従来の文学史叙述が、「和歌」や「物語」, 「随筆」や「連歌」などの〈和文〉を主体に構成されてきたのに対し, 不当に軽視された〈漢文〉の, その重要性を示すことに, 本書執筆の隠れた意図がある。〈漢文〉は近代以前には, そのときどきの文化を中心的に担い, 日本語の発展にも大いに貢献してきた叙述形式である。なのに現在, 中学高校の教育現場で教えられる文学史の内実は, 大きく〈和文〉のテキストに偏っている。これは, 明治近代国家の要請に応え, 外来の文字である「漢字」を極力排して, 自前の文字とされる「仮名」で書かれたテキストにばかり優先権を与えようとした結果である。ドイツロマン派あたりの流れをくむ, 近代ナショナリズムの発想に基づいて, 「〈国民=民族〉国家」にふさわしい文学史叙述が, 是非とも求められたからであった。

明治近代以降の, その偏りを是正すべく, 副題に示したように, 本書では, 〈漢文〉で書かれた「記」の作品を通して, 平安の中ごろから鎌倉のはじめにかけての, 古代都市平安京の変容過程を跡づけた。〈漢文〉のテキスト形式の一つに「記」がある。比較的平易にコトを叙す, その「記」のテキスト形式を踏まえ, 古代都市平安京の空間構成の変化に意を注いだものとして, 慶滋保胤の『池亭記』があり, 藤原明衡の『新猿楽記』があり, 鴨長明の『方丈記』があった。それらテキストを時系列に並べることで, 互いの継承関係を明らかにし, 〈和文〉重視の従来の文学史とは違う, もうひとつ別の, オルターナティブな文学史を構想してみせた。その際に, 作者の個人的経歴と係わらせるお定まりの分析手法を採らなかった。それらテキストを, 本書では, 住まいとしての「住居」, 住まいとしての「都市」, 住まいとしての「身体」, 住まいとしての「現世」といったように, 広く空間認識の遷移としてとらえ, 意味づけしてみせた。建築家の磯崎新や, 思想史の丸山眞男, さらに精神分析家のジャック・ラカンなどの所説を縦横の参照しつつ, 従来の文学史叙述にとらわれることなく, 個々のテキストを丹念に分析し, 解説し, 注釈し, 翻訳し, つまりはさまざまにパラフレーズしてみせた。

結論として言えば, こういうことになる。鴨長明の『方丈記』は, 〈隠者文学〉などという極めて近代的なジャンル区分に収まりきるやわなテキストでは, 決してないのだということ, これである。

(深沢徹)

3. 小倉英敬『グローバル・サウスにおける「変革主体」像 「21世紀型」社会運動の可能性』

揺籃社, 2018年6月15日, 269頁

本書は筆者が刊行中である『グローバル・ヒストリーとしての「植民地主義批判」』全10巻の第2巻である。新自由主義的なグローバル化の加速化に伴って, 世紀転換期頃より20世紀型の「南北問題」の視角は有効性を失い, 「グローバル・サウス」という旧「南北」双方におけるグローバル化の犠牲者あるいはその恩恵から排除された人々を表現する概念が使用されるようになってきた。その一方で, 1990年代半ば頃より世界的にも社会運動の質に変化が生じ, 世紀転換期当初は「ネットワーク型」の社会運動が拡大し, その後2010年代からは「クラウド型」の社会運動が登場して, SNSを駆使して数十万人規模の街頭行動が実施されるようになってきた。本書は, このような現象の背景にある, 資本主義システムの変化やそれに伴う「変革主体」の変容を「グローバル・サウス」の概念を軸に検証し, さらに世界的に拡大している代表制民主主義の形骸化や「政治の劣化」を克服してゆく, 新しい方向性を考察することを目的としている。

(小倉英敬)